

40 小島宝素・海保漁村の天保十三年

の京都訪書行について

町 泉寿郎

幕末考証学の精華といわれる『経籍訪古志』には、著録本の主要所在地として幕府紅葉山文庫・昌平疊・医学館といった幕府機関と、医官多紀氏・曲直瀬氏・山崎氏等や狩谷掖斎・伊沢蘭軒・小島宝素・渋江抽斎らの江戸の蔵書家の名が挙げられている。長沢規矩也の詳細な研究等によってこれまで知られている同書の成立過程や編纂者の構成から考えて、上記の所在名は予想できるところである。

このほかに全著録の一割に満たない数ではあるが、京都の医官福井氏・高階氏・伊良子氏・畑氏・荻野氏・錦小路氏、青蓮院・高山寺・東福寺・東寺・高野山・石山寺等の京都及びその周辺からの著録があり、これまでのところこれら江戸以外の場所に所蔵されていた書籍が著

録されるに致った経緯については、必ずしも明らかにされてはいない。

関西方面の古書調査といえば、掖斎の数度に及ぶそれが想起されるが、小島宝素と海保漁村の天保十三年九月から十二月にかけての西遊のことは閑却視されている。この宝素・漁村の訪書行は、掖斎の調査結果をもとに、江戸の多紀元堅等と連絡をとりつつ進められた大がかりなものであった。この時の閲覧書目・書誌は宝素によって『河清寓記』として纏められ、現在森立之転写本（国立国会図書館所蔵）の存在が知られている。先に著者が『日本医史学雑誌』第四二卷三・四号において同書を活字翻刻したところ、『経籍訪古志』が同書に負うている記事を多数発見した。天保十三年の訪書行が『経籍訪古志』成立に重要な貢献をしたことを知るのである。

九月三日に江戸を発つてから同月二十二日に着京までの旅程は、漁村の漢文体紀行『西遊日記』（無窮会図書館所蔵）によって詳細を知ることができる。各地での寺宝拝観、旧知との邂逅、古書に関する伝聞、古戦場の叙述に、その嗜好と交友を見ることができるといえる。

京都滞在中と近畿各地周遊中の消息は、多紀元堅・渋江抽斎・伊沢榛軒に宛てて宝素が滞在先から出した書簡（日本大学医学部図書館所蔵）によってわかる。最重要閲覧先である福井氏崇蘭館には九月二十八日に初訪問し、先ず四十点余りが著録された。漁村も崇蘭館において経・子・集の善本を影写した（尊経閣文庫所蔵『古本留真譜』）。十月一日には古書籍商林喜兵衛が売本目録を携えて訪れ、宝素は早速、多紀氏の蔵書目録を操って、元堅に未収蔵の書目について照会した。十月五日には福井棟園の案内で両人は三尾に紅葉を看、高山寺の夥しい古写本を閲覧した。高山寺資料は近年、総合調査がなされ『高山寺資料叢書』（東京大学出版会）として刊行されている。その研究成果と対照することにより、宝素・漁村の調査、及びそれに基づいた『経籍訪古志』の記述に新たな評価が与えられるであろう。十月七日、十三日には鷹峯に高階経宣を宝素が訪れた。高階氏は福井氏とは蔵書家としてライバル関係にあり、宝素の崇蘭館閲覧を快く思っており、進んでその仲介をしたらしい。十月中に宝素は伊良子・三角・小森・畑・百々・荻野・錦小路等各氏の所

蔵の古医書を縦覧し、漁村は医書以外をも閲覧すべく宝素とは別行動をとって公家日野・東坊城等を訪ねている。宝素は十月二十四日には仁和寺に、当時伝存の『医心方』二十二包分を見た。彼の著名な業績をして知られる『新修本草』研究に関しては、十一月十二日に当時未紹介の四卷分を閲覧した。従来、宝素の見たものは仁和寺所蔵の古写本とされているが、これには疑問が残る。

帰途の詳細は余り明らかではないが、十二月三日に名古屋藩医浅井紫山と共に真福寺経蔵を閲覧しているのが注目される。

これまで『経籍訪古志』成立の過程で、小島宝素の役割は不明、海保漁村は漢作文添削者とされてきたが、これには明らかに再検討の余地が残っているのである。

（北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部）